

申請者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	渡邊久美	印
調査研究課題	精神看護学領域におけるハンドマッサージの臨床導入に向けた基礎的研究						
交付決定額	200,000						
調査研究組織	氏名		所属・職		専門分野		役割分担
	代表	渡邊久美	看護学科・准教授		精神看護学		研究計画、データ収集・分析、研究総括
	分担者	山下亜矢子	看護学科・助教		精神看護学		データ収集、分析
調査研究実績の概要	<p><b>【目的】</b> 精神看護学領域では、緊張や不安の高い対象に用いるリラクゼーション技術が有用とされている。本研究では精神科看護臨床で広く臨床導入するための普及教材を開発し、これを用いた専門職への教育的アプローチを行い、施術者と対象者の心理的距離の変化について質的研究により明らかにした。</p> <p><b>【方法】</b> 1. 期間：平成25年5月～平成26年3月 2. 教材開発の方法 ハンドマッサージの臨床導入にむけた普及教材の全体構成は、①導入編資料、②演習資料、③DVDによる実技演習ガイドの3部構成とする。ハンドマッサージの原案は、國方と渡邊が共同開発し、既に健常者を対象に効果が実証されているもので、合計15分程度の内容である。マッサージの展開は「腕包み」「手首ワイパー」「手の甲8の字」「掌もみ」「指もみ」「手包み」の6段階で構成されている。これらを習得するための教材開発にあたり、研究者が、文献検討に基づきながら、導入編、演習資料（演習時の自己評価）、映像による実技演習ガイドを作成した。</p> <p>3. 教材の評価方法 在宅ケアに携わる専門職約10名を対象に、マッサージの演習を取り入れた説明を行い、開発したハンドマッサージ方法に関するヒヤリングを行う。その後、協力の得られた施設に、対象への実施を依頼し、実践における効果についてアンケート調査を行う。アンケートは、①なぜ、その対象に実施しようとしたか、②どのような声かけで取り入れたか、③対象者の反応はどうだったか、④その他について、記述での回答を求めた。これらの記述内容を分析対象とし、評価を行った。今回は、③の対象者の反応を報告する。</p> <p><b>【結果】</b> 1. 教材開発のプロセス 文献検討の結果、身体の部所を手にて特定したマッサージの文献は見あたらず、方法論として、タクティールケアや、背部マッサージ、アロマオイルなどを用いたマッサージ効</p>						

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>果の実証的な研究が多く報告されていた。また精神障害者を対象とした研究では認知症が多く、統合失調症を対象とした研究論文は見あたらなかった。今回、精神科臨床への導入を目的としていることを考慮して、ハンドマッサージの簡易性や、統合失調症の事例への効果を紹介する内容を導入編資料とした。</p> <p>演習資料とした、技術を自己評価するための評価表としては、①6つの展開を覚えた、②各部分の流れを途切れることなくスムーズに実施できた、③クリームの量を適当に調整することができた、④圧の強弱を、相手に確認しながら調整できた、⑤自分自身がリラックスして行うことができた、⑥相手との心理的距離感について考えた、の6項目を、「大変できた」から「全くできなかった」の5段階とした。DVDは6段階のセクション毎に構成した。</p> <p>2. ハンドマッサージの臨床導入に向けた普及教材の評価</p> <p>1) 技術演習を通じたヒヤリングによる評価</p> <p>導入の理論編資料と仮完成した個別実技演習の教材システムを活用し、デモンストレーションを交えて、訪問看護師およびヘルパー、ケアマネージャー10名に、本ハンドマッサージ法を提示し、演習を行った後で、ヒヤリングを行った。マッサージの導入に関して、訪問看護師は、利用者や疲労感の強い介護者への導入が検討され、「マッサージを習ってきたので」といった声かけで導入可能とのことであった。また、ヘルパーは、日常業務の中でマッサージのような身体ケアを行うことができないという制約があったが、ヘルパー自身のメンタルヘルス支援の観点からニーズがあった。ケアマネージャーの場合は、公平性を保つことのできる対象選定について議論があったが、モニタリング時に活用は可能とのことであった。また演習後に「実施した方も大変気持ちよいことがわかった」などの意見があった。</p> <p>2) 在宅ケアにおける導入事例のアンケート調査</p> <p>習得したマッサージ技法を、在宅ケアの専門職（訪問看護師およびケアマネージャー）の協力を得て、在宅ケアサービスの利用者もしくは介護者に実施し、心理的距離に変化があったかどうか等について質的データにより評価を行った。訪問看護ステーションの利用者および介護者に対して、単発・継続的に実施した結果、1例を除き、肯定的な反応が得られた。対象者は、サービスの利用者7名、主介護者3名で、性別は男性が3名、女性が7名であった。年齢は40歳代が1名、70歳代が3名、80歳代が2名、90歳代が3名であった。具体的な効果として、施術中にうとうとするなどのリラックス効果以外に、難病の疾病告知をされた男性（70歳代）が施術中、疾患の受けとめや今後に向けた思いなどを語ったり、介護者と1対1で行うために、利用者への気兼ねなく様々な介護の苦労話を語った事例など、被施術者が施術を通して心の内を開く様子が報告された。また、対象者以外からの事後評価として、「マッサージが一番喜び、気持ちいいと言っている」と家族による言葉や、施設のスタッフにマッサージをしてもらったことを伝えていた事例があった。施術者側の効果として「相手に触れることで近く感じられる」「逆に自分の方があたたかな心を感じた」「継続的にやりたい」との感想が聞かれた。</p> <p>【考察】</p> <p>ハンドマッサージの教材開発により、現場のスタッフへの紹介、導入がスムーズに行え、臨床導入に向けた普及教材としての活用可能性が期待された。また、対象者の多くがマッサージを喜んで受け入れており、実施による対象者の反応も良好であった。特に、短い実施時間の中で、普段の訪問ケアの中で語られない内容の会話を認めた事例や、施術者側にも対象との心理的距離が短縮された報告があったことは、評価すべき点と考えられた。今後の課題として、被施術者からのフィードバック用の評価表を作成し、手技の向上を図ると同時に、事例数を増やし、これらの質的に明らかにされた効果を量的研究によりに検証していく必要がある。</p>
<p>成果資料目録</p>	